月刊FALCOM MAGAZINE

Vol.111



ザナドゥに謎の辻切り現る!?

も～っと集まれ！ファルコム学園

ついに学園占拠の
首謀者が判明、しかし……

英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～

今月も『閃の軌跡Ⅳ』から
新キャラクターが引き続き参戦！

『英雄伝説 暁の軌跡』

『軌跡』シリーズ始まりの物語を振り返る

英雄伝説 空の軌跡

ファルコムニュース

炎の舞姫、ここに復活!

英雄伝説 創の軌跡



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

『英雄伝説 創の軌跡』の発売日が 8 月 27 日に決定 !!



『軌跡』シリーズ最新作『創の軌跡』の発売日がついに 8 月 27 日に決定！
また今回は新たな戦闘システムや、アリオス・マクレインほか、魅力あふれる各国の登場人物たちの詳細も到着した！

『英雄伝説 創の軌跡』公式ホームページ
https://www.falcom.co.jp/hajimari/

タイトル：英雄伝説 創の軌跡　**発売日**：2020 年 8 月 27 日予定
ジャンル：ストーリー RPG　**対応機種**：PlayStation®4　**プレイ人数**：1 人
小売価格：[通常版] 7,800 円 (税抜) [Platinum マイスター BOX] 10,800(税抜)
CERO レーティング：審査予定

※画面は開発中のものです。

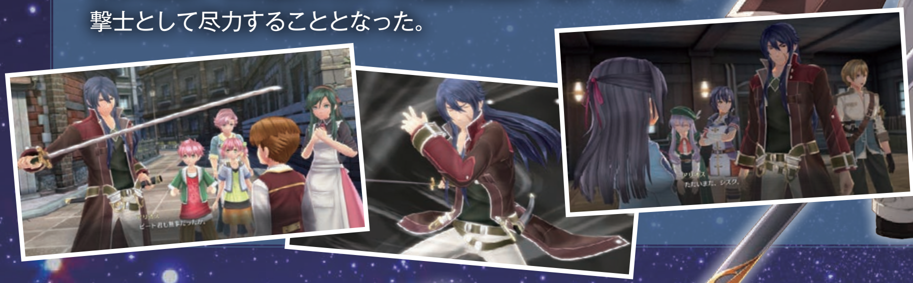
アリオス・マクレイン

CV：森川智之



「過去の咎があるこの身……
立ち居振る舞いは考えるべきだろう」

八葉一刀流・二の型《疾風》の免許皆伝にして、クロスベル自治州を代表するＡ級遊撃士。
《風の剣聖》の異名で国内外に知られており、クロスベル市民や遊撃士協会を支持する人々から絶大な人気を得ている。
かつてはクロスベル警察の捜査官として活躍していたが帝国と共和国の暗闘から起こった不幸な事故が原因で警察を辞職、その後は遊撃士として任務に没頭することで悲しみを紛らわせていた。
七耀暦 1204 年に起こったクロスベル独立国事件の際は立場を異にするロイドら《特務支援課》と敵対する形となってしまったが、その後はクロスベル独立のため、再び一人の遊撃士として尽力することとなった。



ツァイト

CV：龍谷修武



「背が伸びたな……
人の子の成長というのは早いものだ」

古の時代よりクロスベルの行く末を見守り続けてきた聖獣で、《神狼》の伝説で人々に語り継がれてきた存在。
七耀暦 1204 年にマフィアが引き起こした魔獣被害騒動をきっかけに《特務支援課》の一員となり、警察犬としてロイドたちに力を貸すようになった。
マフィアによる《黒の競売会》、教団事件など数々の事件で活躍し、《特務支援課》をサポートしていたがエレボニア帝国での災厄《巨イナル黄昏》の前に消息不明となり、クロスベルの地から姿を消してしまった。



リーシャ・マオ

CV：佐藤利奈



「かつての契約相手だろうと
もはや容赦するつもりはありません……！」

クロスベル自治州の劇団《アルカンシェル》でアーティストとして活躍している、大人しく控えめな性格の娘。
その正体は、カルバード共和国で伝説の存在にもなっている暗殺者《銀（イン）》で、身の丈を超す巨大な斬魔刀を得物としている。
《銀》としての仕事を請け負いながら自分の生き方を模索していたが、《アルカンシェル》や《特務支援課》との出会い、クロスベルの人々との生活を通して、一人のアーティストとして生きていくことを決意した。
自らの才能を見出し、《アルカンシェル》に迎え入れてくれた先輩アーティストのイリアを誰よりも慕っており、クロスベル再独立を記念した公演に向けて練習の日々を送っている。



イリア・プラティエ

CV：浅川悠



「ほらほら、ブランクのあるあたしに
負けてたらお話にならないわよ？」

強烈なカリスマ性と情熱的な演技から《炎の舞姫》とも称される劇団《アルカンシェル》のトップスター。
かつて猟兵団《赤い星座》の襲撃に遭い再起不能と言われるほどの大ケガを負ったものの、ウルスラ病院での最先端治療と不屈の精神でリハビリを続け、念願の舞台復帰を果たした。
アーティストとして若干のブランクが生じたもののリハビリ中もずっと《アルカンシェル》のことを考えていたらしく、リーシャやシュリが心配になるほど記念公演に精力を注いでいる。



マテウス・ヴァンダール

CV：小山力也



「剣は形あるものに非ず、自らの内側に宿るもの。
己が形を掴めば、それ即ち剣の形なり」

代々皇族の守護職を務める武の名門・ヴァンダール家の現当主にしてヴァンダール流剣術の総師範。
クルトやミュラーの父にあたり、《雷神》マテウスとしてその名を轟かせる帝国最高峰の剣士でもある。
必要以上に言葉を発しない寡黙な性格でいつも硬い表情をしているため周囲から誤解されることもあるが、彼の内面を知る人々からは深く慕われている。
クロスベル再独立の調印式が行われる数日前から鉄道憲兵隊のクレア・リーヴェルト特務少佐と連絡を取りヴァンダールの門弟に指示を出すなど奇妙な動きを見せているが……。



オリエ・ヴァンダール

CV：ゆかな



「──寡黙なあの人にしては
珍しいこともあるものですね」

マテウスの後妻にして特務科《Ⅶ組》に所属するクルトの母。
自身も《風御前》と呼ばれるほどの腕前を持ち、帝国内のヴァンダール流道場では師範代を務めている。
帝国を襲った災厄ではヴァンダール家のゼクス、ミュラーと共に《黒の工房》が開発した魔煌機兵を退けるなど、新旧《Ⅶ組》の活路を切り開くために自ら戦場に赴いて薙刀を振るった。
基本的にはお淑やかで凛としているが、稽古の際は容赦のない一面を見せる事があるため門下生にとっては総師範のマテウスよりも怖い存在らしい。





「ちょうど生体部品（パーツ）が足りていなくてね。
君のような優秀な個体が欲しかったのさ」

F・ノバルティス博士

CV：真殿光昭

結社《身喰らう蛇》の使徒・第六柱にして兵器開発を担う《十三工房》を統括するマッドサイエンティスト。
天才的な頭脳を持っているが自身の研究以外には興味が無いらしく、他人を嘲る振る舞いを平然と行うなど他の使徒、執行者からも“悪趣味”だと蔑まれている。
ゼムリア大陸各地で人形兵器を放ったり、自身が開発した三体の“神機アイオーン”を実戦に投入するなど、これまでに“実験”と称して様々な形で結社の計画に関わってきた。



最大10人で発動する新戦闘システム【ヴァリアント・レイジ】！

『閃の軌跡』から登場した「戦術」リンクシステムの発展型として今回、パーティメンバーが５人以上の時に発動できる新たな戦闘システム【ヴァリアント・レイジ】が登場！　ヴァリアント・レイジはメンバーが５人以上いて、さらに AG（アサルトゲージ）が１ゲージ以上溜まっていると発動することができ、コマンドを切り替えることで、攻撃や回復ができるのだ。
待機中のメンバーも参加するため、ダメージや回復値が桁違いになっているほか、BP（ブレイブポイント）や CP（クラフトポイント）の上昇、ステータス異常の回復など、様々なボーナスも得ることができるようになっている。

●Ｖアーツ　●Ｖアタック　●Ｖヒール



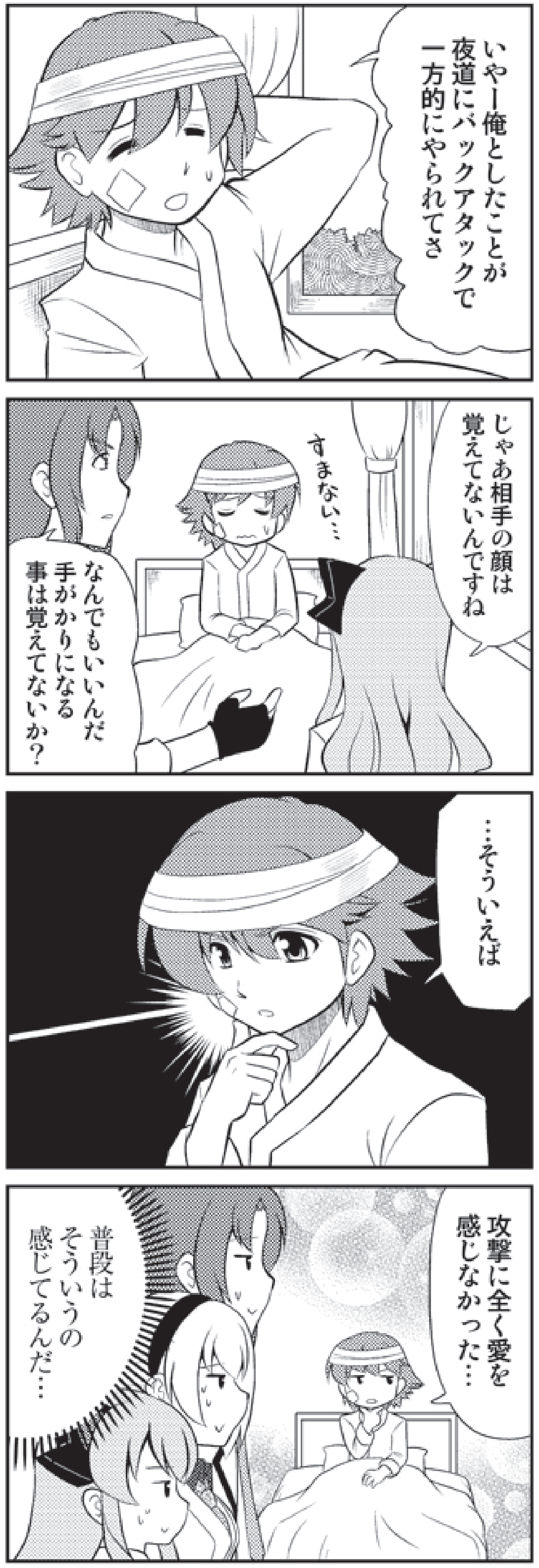
①発動可能　②コマンド切り替え　③選択画面　④発動



★さぁーて今月の"怪人"は?★



手がかり



色々とあぶない刑事



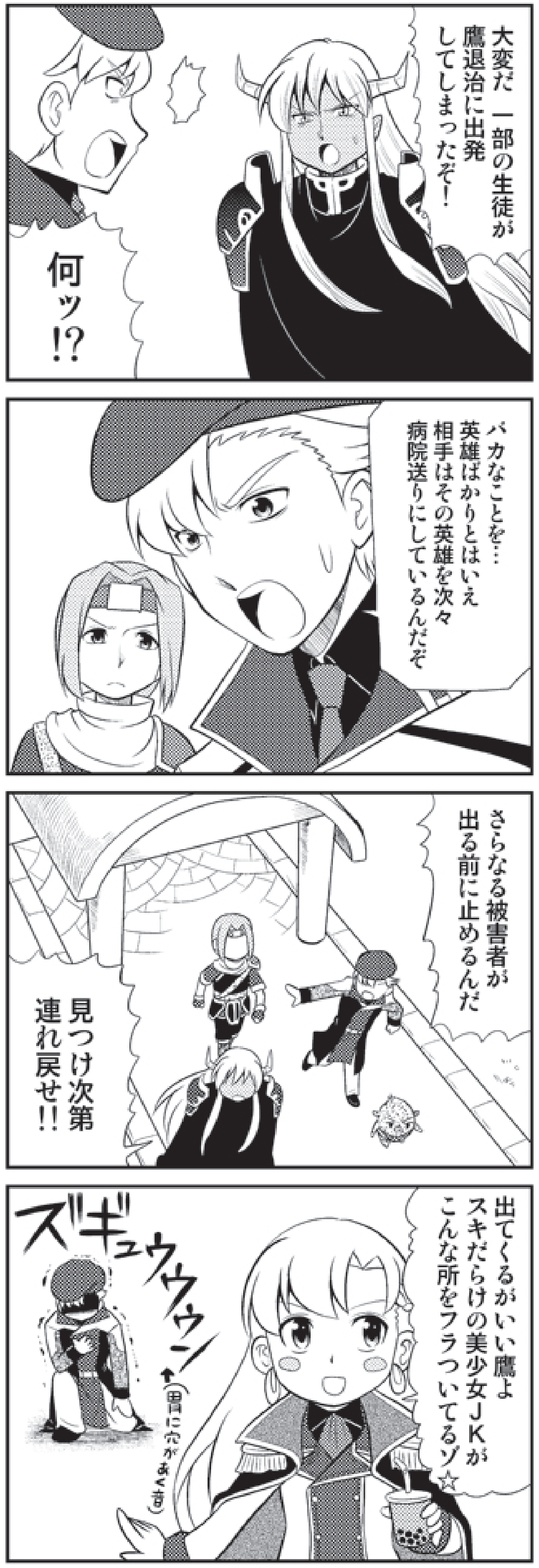
続出する被害者



ナハトと鷹



分校長はスキだらけ



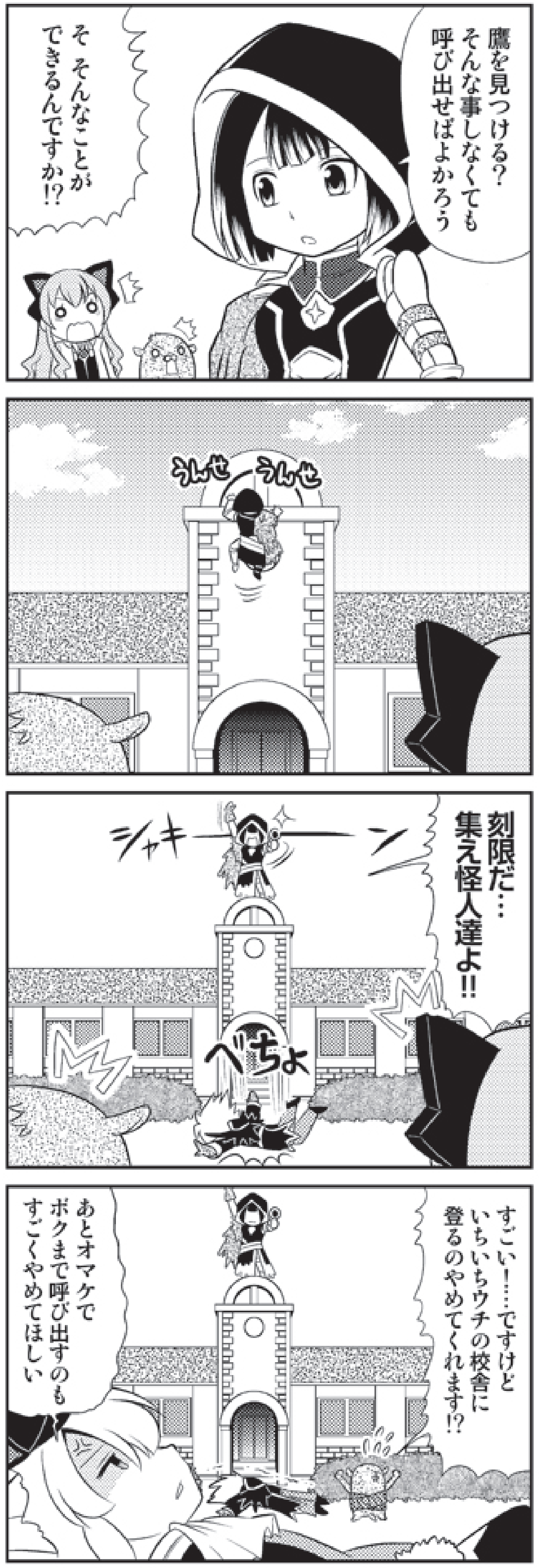
ロイドの推論



忍び寄る怪人



やめてほしいこと



念願の戦い



鷹、魂の叫び



高校デビュー失敗な感じ



クルトの評価



鷹より強いもの



いつかファルコムへ

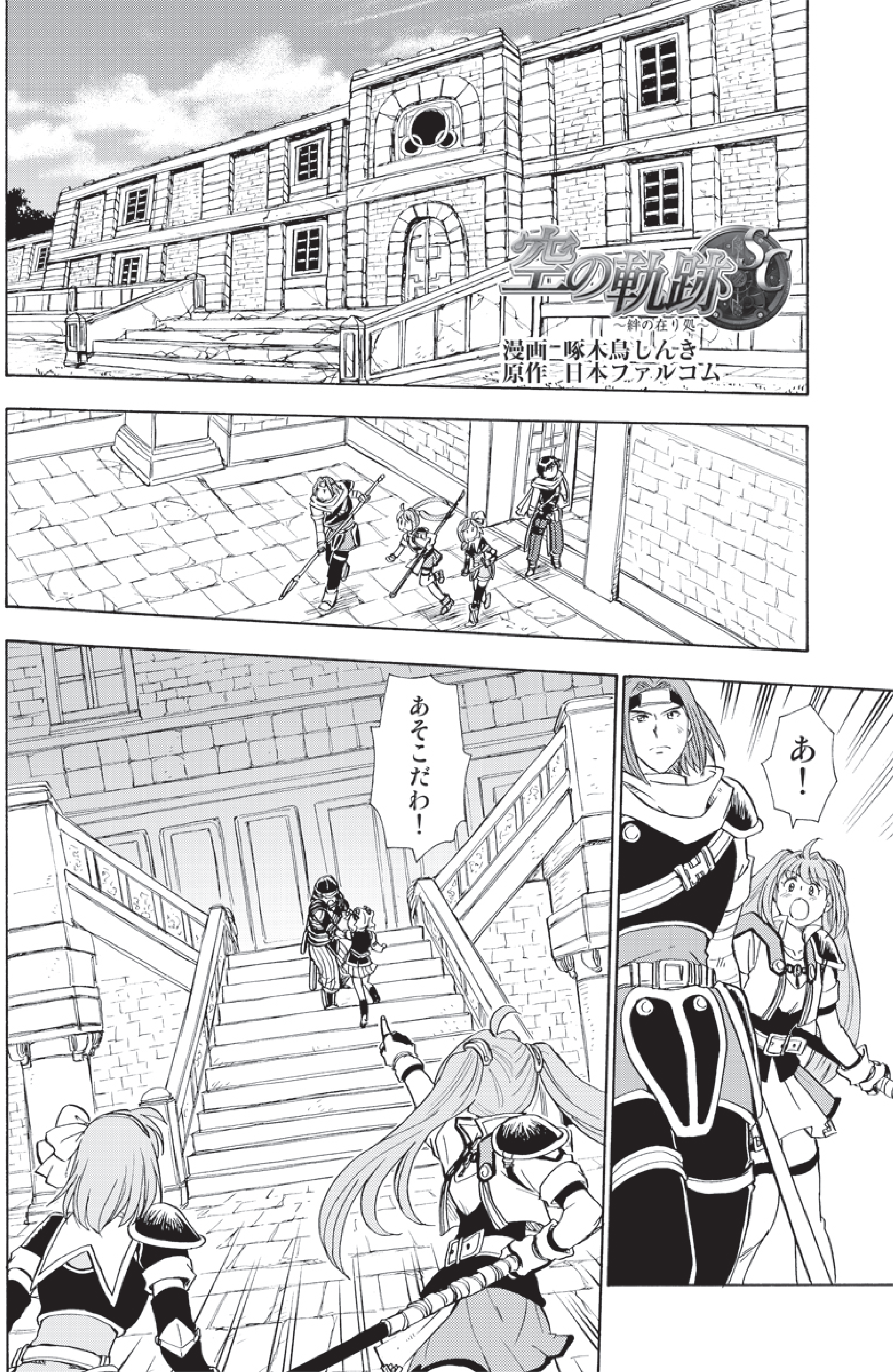




発行：フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
発売：メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks



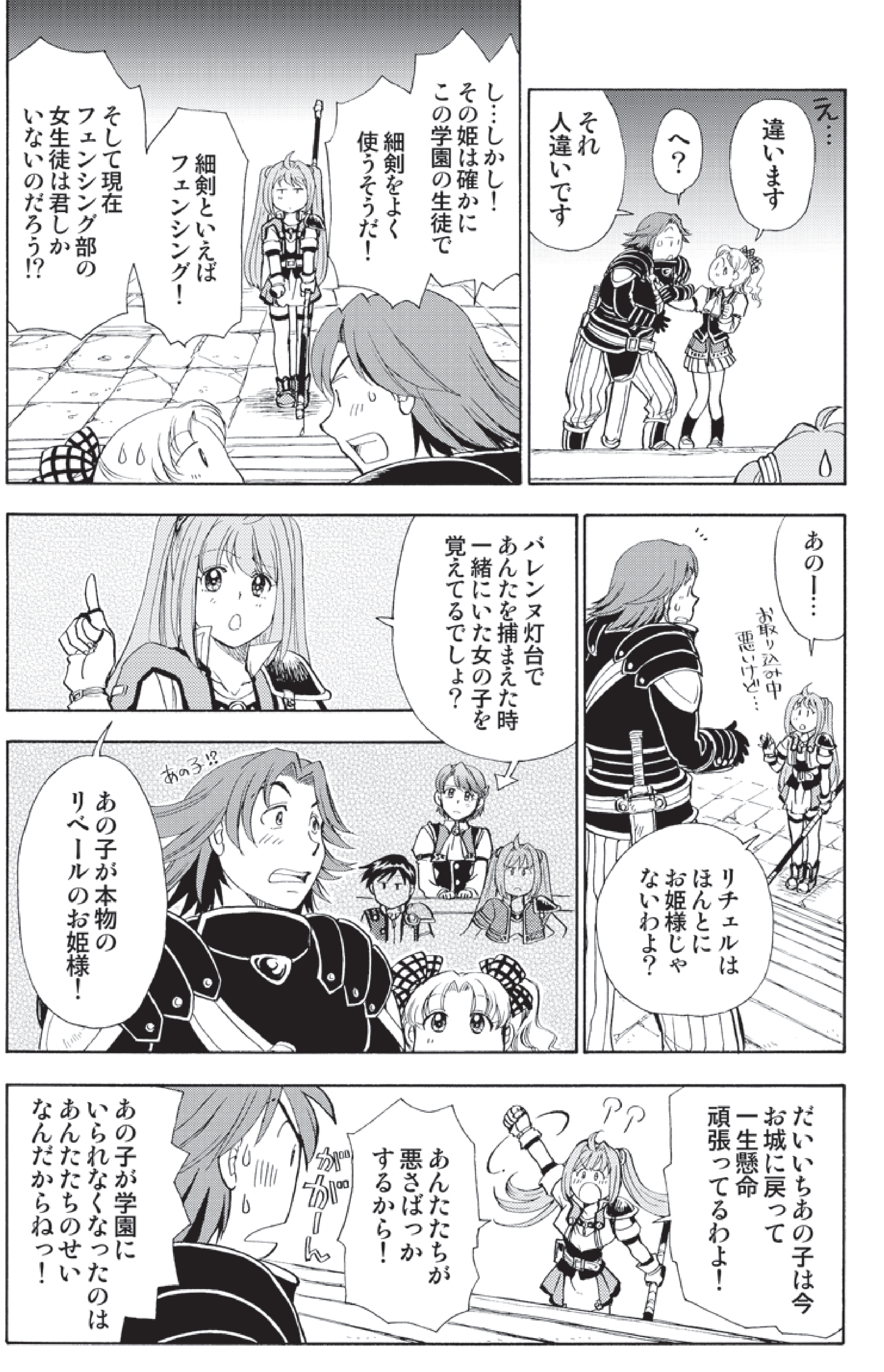
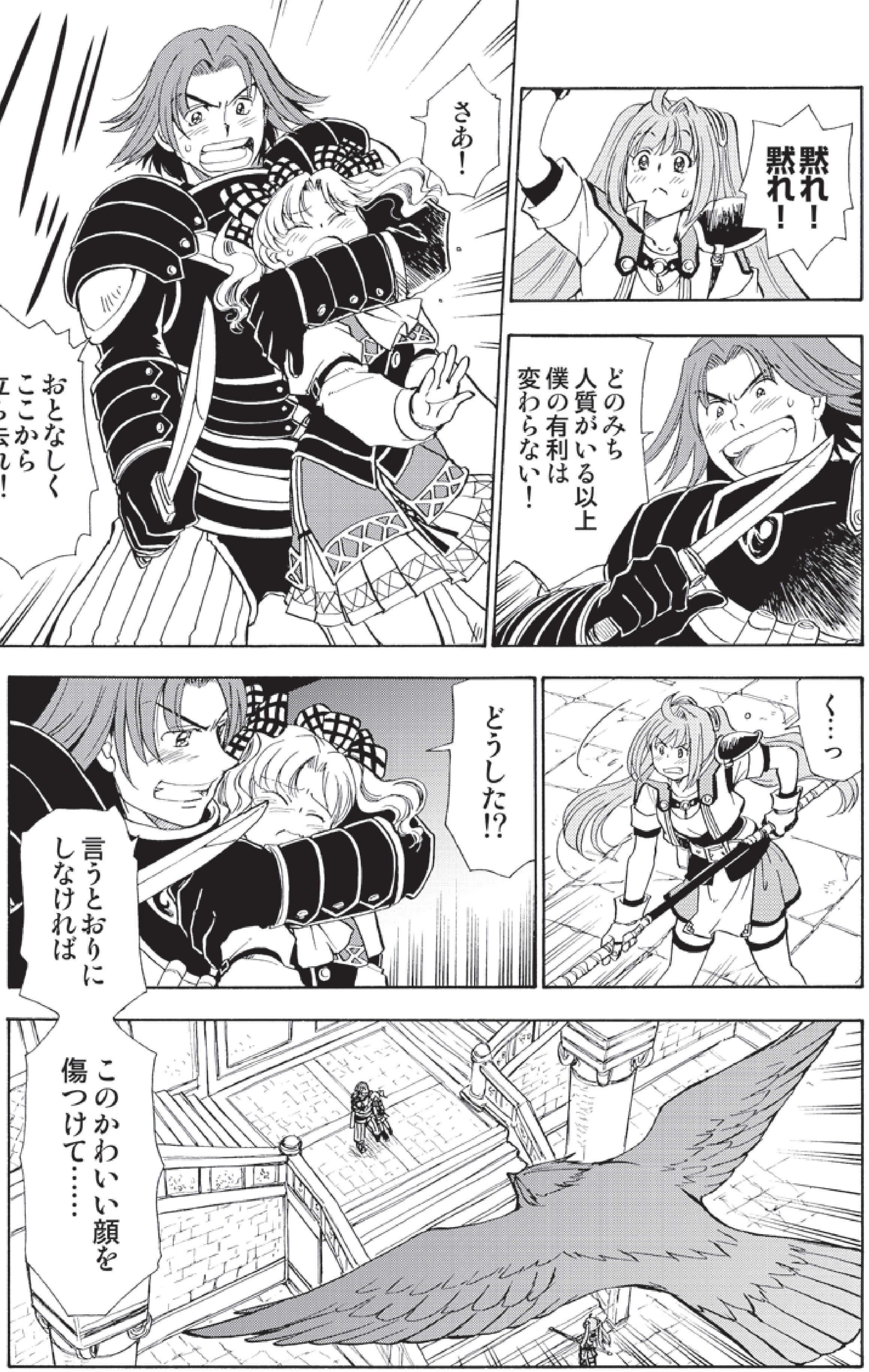
発行：フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
発売：メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks


空の軌跡SC
~絆の在り処~
漫画：啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
あ!
あそこだわ!


あの子は
クローゼの後輩の…
リチェル…!
そこのあんた!!
その女の子を離しなさい!!
ぱっ
フッ…
君たちか…
再び僕に会えるとは
まさかこの懐かしきルーアンの地で
夢にも思っていなかっただろう!?


前回はまんまと君たちに邪魔されてしまったが
今度ばかりはそうはさせないぞ!!
……
……
…どちらさま?
ガーン
ダルモア市長の元秘書ギルバートだ!
自分が逮捕した人間くらい覚えていたまえ!
そんな人がどうして結社の服なんか着て人さらいなんてやってんのよ
よくぞ聞いてくれた
あー……思い出した
孤児院放火事件の犯人の…
灯台で黒装束に撃たれて泣いてた人ね…


犯罪者として投獄されてしまったが
クーデターの混乱時にスキを突いて脱出してね
その後結社に拾われて
忠誠を誓うことになったのさ
結社《身喰らう蛇》は巨大な組織!
さぞかし出世のしがいがあるに違いない!
まずはこの娘を手土産に
結社の階段を上り詰めてやるのさ!
わ…私なんか連れてっても出世の役には立ちませんよぅ
フッフッフッ
僕は知っているのだよ
君が
身分を隠したリベール王家の姫だということを

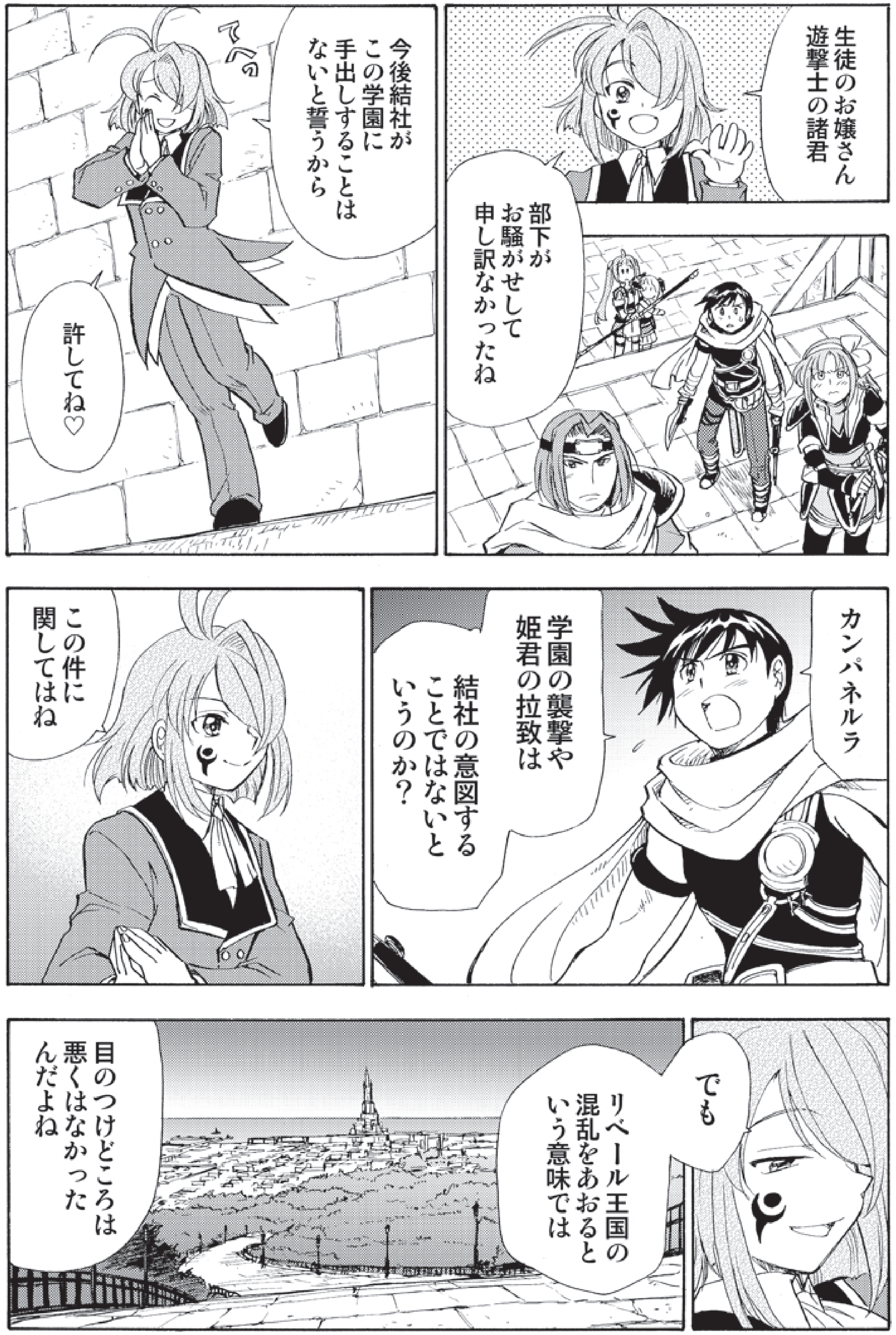

え…
違います
へ？
それ
人違いです
し…しかし！
その姫は確かに
この学園の生徒で
細剣をよく
使うそうだ！
細剣といえば
フェンシング！
そして現在
フェンシング部の
女生徒は君しか
いないのだろう!?
あの…！
お取り込み中
悪いけど…
リチェルは
ほんとに
お姫様じゃ
ないわよ？
バレンヌ灯台で
あんたを捕まえた時
一緒にいた女の子を
覚えてるでしょ？
あの子!?
あの子が本物の
リベールのお姫様！
だいいちあの子は今
お城に戻って
一生懸命
頑張ってるわよ！
あんたたちが
悪さばっか
するから！
ががーん
あの子が学園に
いられなくなったのは
あんたたちのせい
なんだからねっ！

黙れ！
黙れ！
さあ！
おとなしく
ここから
立ち去れ!!
どのみち
人質がいる以上
僕の有利は
変わらない！
く…っ
どうした!?
言うとおりに
しなければ
このかわいい顔を
傷つけて……


どあっ
リチェル！
こっちよ！
この…っ
はいっ
逃がすもんか…


ぴゅーい
ジーク！
これで終わりだね！
ひっ
協会規約に従い
君の身を拘束させて…
ボウゥ…
それは困っちゃうなぁ


ブオオオ゛ッ
なんだ!?
あれは…
やっぱり
いたのか
カンパネルラ様!
助けにきてくれたんですね!


まぁ
僕たちは一応「秘密結社」だからさ
場末の兵士でも逮捕なんかされちゃうと色々まずいんだよね
はいっ
…それはそうと…
ギルバート君?
僕
王家の姫君をさらえなんて命令した覚えないんだけど?
は…
野心に燃えるのは結構なんだけどさ
それで失敗してたら意味ないよねぇ


生徒のお嬢さん
遊撃士の諸君
部下がお騒がせして申し訳なかったね
今後結社がこの学園に手出しすることはないと誓うから
てへ
許してね♡
カンパネルラ
学園の襲撃や姫君の拉致は
結社の意図することではないというのか？
この件に関してはね
でも
リベール王国の混乱をあおるという意味では
目のつけどころは悪くはなかったんだよね


リベールの混乱をあおる…
それが結社の目的なのか!?
いやいや
そんなことはどーでもいいんだけど
ぼくらはね
ただ
そーゆーことをするのが大好きだっていう悪趣味な人が
今回の計画の第一責任者だったりするからさ
ふぉん
まぁちょっと大変だろうけど
せいぜい頑張って
君たちのリベール王国を守ってみせてね♡
ゴゴゴゴ!!
次回に続く

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

ファルコムショップで新作グッズが続々発売!!

ゆるみっしぃの
むにむにぷちぷちビーズキーホルダー！

ゆるみっしぃ セプチプチウムキーホルダー

ゆるみっしぃのむにむにぷちぷちビーズキーホルダー！
カラーは、軌跡シリーズおなじみの七耀石（セプチウム）になぞって、「地（オレンジ）」「水（スカイブルー）」「火（ピンク）」「風（グリーン）」「時（濃グレー）」「空（イエロー）」「幻（ライトグレー）」の７色展開！



本体サイズ:約W50mm×H70mm
発売日:5月20日
価格:690円（税抜）

ゆるみっしぃといつでもどこでもいっしょ♪

ゆるみっしぃのゆるふわチャーム

サイズは足から耳まで約10cm。
カバンにくっつけたり、部屋に飾ったり。ゆるっとみっしぃが癒しをお届け！





発売日:5月20日
価格:1,000円（税抜）

「閃の軌跡シリーズ」のキャラクターたちの
集合イラストをBACKにデザイン！

閃の軌跡Tシャツ-ROUND OF SEVEN-

FRONTには、前を開けてパーカーをはおると胸元にちらっと見えるように「ROUND OF SEVEN」の文字を配置。S・M・L・XLの４サイズをご用意！

■ファルコムショップ
https://falcom.shop/







発売日:5月20日
価格:3,500円（税抜）

『英雄伝説 零の軌跡：改』発売記念オリジナルPS4テーマ発売！

ダウンロード版発売を記念して、４月 23 日 (木) よりクロスベル警察《特務支援課》に所属するメンバーから３種類のオリジナル PS4 テーマを発売！

《アイテム名》
「零の軌跡：改」ロイドのテーマ
「零の軌跡：改」エリィのテーマ
「零の軌跡：改」キーア＆セルゲイのテーマ
※それぞれのテーマでは、専用の BGM が使用されています。
税込価格:各150円
■テーマ紹介ページ
https://www.falcom.co.jp/zeroao/#ps4-theme





ロイドのテーマ





エリィのテーマ





キーア＆セルゲイのテーマ

PSストア『Game Weekセール』開催中！

『閃の軌跡Ⅲ』『閃の軌跡Ⅳ』の他、『イース』シリーズ最新作『イースⅨ』もお買い得。この機会にぜひゲットしよう！

《セール対象商品》

PS4「イースⅨ -Monstrum NOX-」⇒　45% OFF



PS4「英雄伝説 閃の軌跡Ⅲ」⇒　50% OFF



PS4「英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ -THE END OF SAGA-」⇒　50% OFF



PS4「英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ -THE END OF SAGA- デジタルデラックス版」⇒ 50% OFF



THE LEGEND OF HEROES

暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
今月はメインストーリー第７章第５弾が実装！
さらに「英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ」からクルトも参戦！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

メインストーリー第７章第５弾「エイヤの民たち／前篇」が実装！

《戦争卿》の拠点捜索のため、絶海の孤島に降り立った試験班。
“エイヤ”と呼ばれるこの島で暮らしていたのは外界を知らぬ民たちだった。

——長の口から語られる歴史
——少女・ロマを苛む掟の秘密
——“エクランド”の名を継ぐノア

明らかになっていく“真実”がやがて新たな“希望”を生む。



4月の新／衣装替えキャラクターをチェック！



新選組・ラウラ

１月のリィンたち以来、３ヶ月ぶりに新選組シリーズが登場！　青のイメージが強いラウラに浅葱色の羽織がぴったりマッチしている。もともと武人の家系だけに、さらし姿が美しくも凛々しい

新選組・フィー

フィーも羽織を着ているものの、猟兵出身ということもあり、こちらは忍装束をイメージした衣装となっている。ところどころに施された衣装の痛みや血痕が歴戦の戦いを彷彿させる。

クルト・ヴァンダール

帝国の武門・ヴァンダール家の次男にして天才的な双剣術の腕を持つ、生真面目な性格の美男子。当初は《灰色の騎士》と持て囃されるリィンの実力を疑っていたが、《新Ⅶ組》として活動する中で、剣士として、教官として真剣に向き合おうとするリィンに学び、まっすぐな心で成長していった。

5月の新規衣装替えキャラクターは？

※画像は開発中のものです。　※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

「ロレントでやり合った、だと?」
モルガンがじろりとエステルを睨みつけてくる。
静かな声で言葉を続けた。
「確かに奴らがロレントに出没したという報告は受けているが……。そう、確かまだ若い遊撃

士を出し抜いて七耀石を強奪したとか……」
「されてない！　ちゃんと護り抜いたし、引き分けだから！　って、しまった！」
「ああ、おバカ……」
　シェラザードがため息をついた。
「……なるほどな。まさか、こんな女子どもが遊撃士とは思わなかったぞ」
「お、女子どもって……」
「姑息な手段を使って情報収集か？　これだから遊撃士など信用できんのだ。おまえたちには、この事件には関わらぬよう言ってあるはずだがな」
　シェラザードがすかさず言い返した。
「メイベル市長から依頼されたのは本当ですし、わたしたちがここにいるのは、あくまで市長からの使いとしてです……。情報を教えてもらわねば市長が困ります」
「黙れ！　小賢しい！」
　モルガン将軍は机を叩いて声をあげた。いちばん近くに立っていたエステルが思わず耳に手を当てて蓋をするほどの大音声だ。
「おい！　羽虫が入り込んでおるぞ！　捕まえろ！」
　声に応じて扉が開き、廊下で見張りに立っていた屈強な兵士たちが部屋へと一斉に雪崩こんでくる。

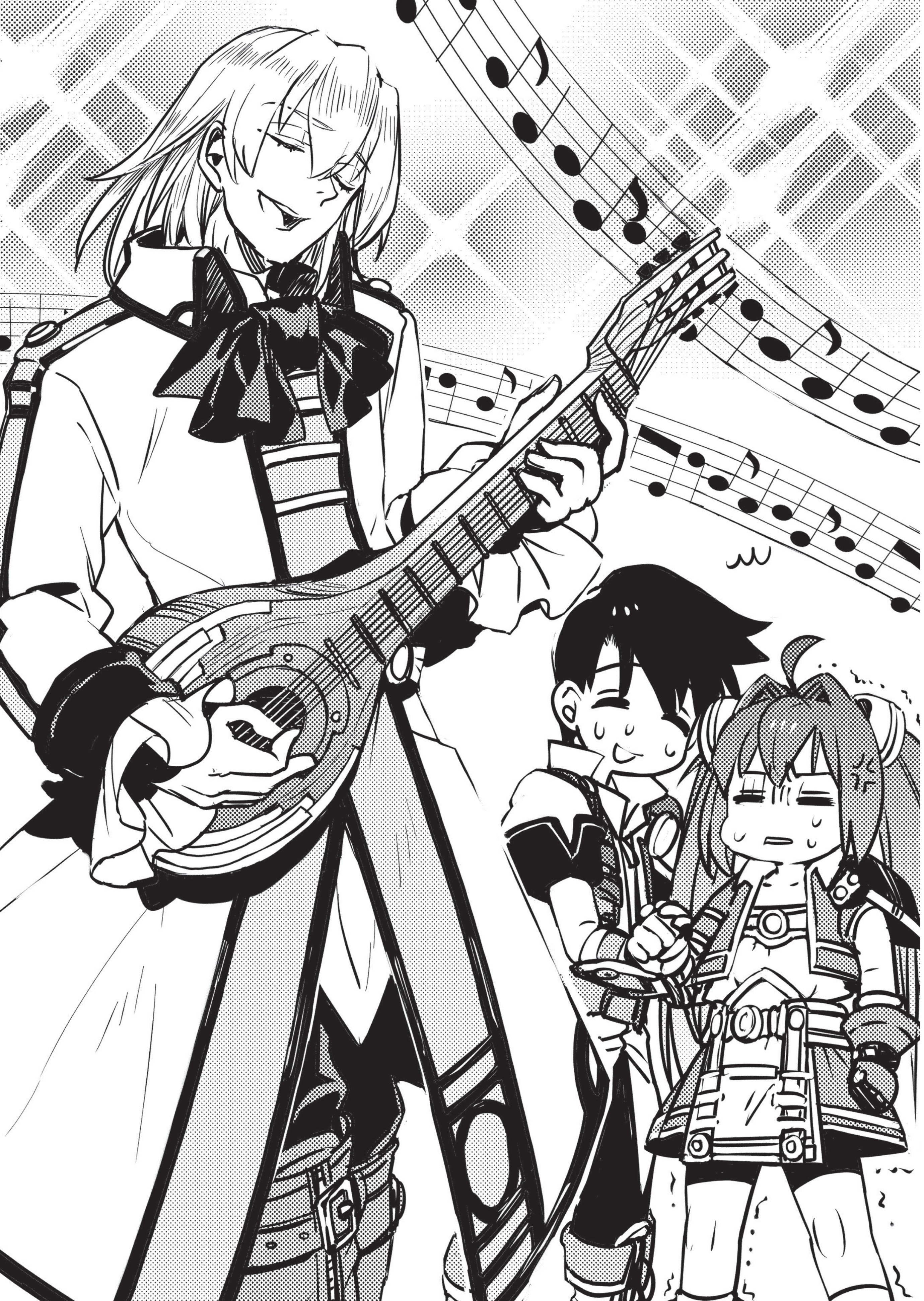
　あっという間にエステルたち三人の周りを取り囲んだ。
「こいつらを即刻つまみ出せ！」
　じりっと包囲の輪が狭まる。
「ちょ、ちょっと待ってよ！」
「たわけ！　女子どもに、こんな重大な事件を任せられるものか。まったくメイベル嬢にも困ったものだ。捜索活動の邪魔にしかならんというのに」
　モルガンの憎々しげな口調に耐えかねたのか、シェラザードが肩を怒らせて前に出た。
「……いい加減にしなさいよ」
「む。なんだ貴様」
「もとはといえば、あんたたち軍人が役に立たないからでしょうが。それを何。言うに事欠いて、女子ども呼ばわりなんて」
「事実だろうが」
「あたしたちが、何も知らないと思ってるんじゃないでしょうね？　この数か月、ボース地方で空賊団が荒らしまわっていたとき、事件を協会に丸投げしてきたのはあんたたちの方でしょうが！　それが、事件が大きくなった途端に手を引けですって？　しかも、将軍自ら捜索に出てるくせに、未だに行方のひとつもわかってないじゃないの！」
「黙るがいい、小娘！」

「いいえ、黙らないわよ！　黙るもんですか。こっちだってそれなりの覚悟ってもんをしてきてるんですからねっ。先生の行方を突き止めるまでは引くわけにはいかないのよ！」
「シェラ姉っ。ちょ、ちょっと……」
　さすがにエステルも止める側に回ってしまう。
（こんなに怒ってるシェラ姉を見るの初めて……）
　こっそりヨシュアのほうを盗み見ると、彼も困った顔をしてシェラザードの肩に手を置くところだった。
「放してちょうだい、ヨシュア。この頑固ジジイを一発しめてやらにゃ、正遊撃士の名がするわ」
「落ち着いてください」
「だ、駄目だってば、シェラ姉っ！」
「生憎だな。小娘に叩きのめされるほどわしは軟弱ではないぞ」
「へえ。言うじゃない……やってみせましょうか？」
　ぶつかる視線の間に火花が散ったのが、エステルには確かに見えた。
　一触即発だ。
　だが、ここで将軍相手に決闘でも始めようものなら、無謀と言われることの多いエステルにさえも、遊撃士の立場が悪くなることはわかる。そうなったら、もう市長のお使いどころではない。

（ど、どうやって止めたらいいの!?）
　シェラザードは今にも飛びかかりそうな様子で、周りを取り囲む衛兵たちのほうも将軍の合図ひとつでエステルたちを取り押さえにかかりそう。激昂するシェラザードを見て、モルガン将軍はせせら笑うかのような表情を浮かべている。
　どうしていいかわからないエステルが、やけになって自分も一緒に戦ってしまおうか、などと物騒な考えに取りつかれたときだった。
「争いは何も生み出さないよ……、ただ不毛な荒野を広げるのみさ」
　場違いな台詞が飛び込んできた。
　そして、言葉とともにポロンと弦の鳴る音が響いたのだ。
「ひび割れた不毛の大地を癒すのは、荒れ果てた廃墟を慰めるのは……そう、愛！」
（……はい？）
「今ここで争い合う君たちに歌を贈ろう。凍てついた心に温もりを取り戻すための愛の歌を！　さあ、聴いておくれ。我が奏でる楽の音に乗せて歌う、愛の歌を！　流れゆ〜く〜ほぉおおしの〜〜〜」
　朗々とした歌声が響き渡った。
（けっこううまいじゃないの……って、そうじゃなくて！）

振り返りたくはなかったけれど、たまりかねてエステルは振り返ってしまった。
エステルたちを取り囲む兵士たち。その囲みの向こう、開いた扉の先の廊下にひとりの男が立っている。
小型の弦楽器――リュートをかき鳴らしながら、金髪の青年が張りのある声を響かせて歌っていた。
部屋のなかにいた誰もが、あまりのことに呆然として聴き入ってしまう。
それは『琥珀の愛』という名の流行り歌だった。
エステルも聴いたことがある。帝国の都の歌劇場で初めに歌われて喝采を浴び、それ以来、大陸に広まりつつあるとか。
接吻とか愛とか、そんな恥ずかしい単語を惜しげもなく使った歌詞で、あまりに甘すぎてエステルは覚えようという気力を無くしてしまったやつだ。
曲はけっこう好きなタイプだったのだが。
(って、そんなことどうでもいいの！　あの男……！)
声でわかっていたけれど、金髪はオリビエと名乗った青年だった。
(いつの間に兵舎に入ってきたのよ!?)
曲が終わった。
笑みを浮かべ、胸元に手を当てて、優雅に腰を折った。

それから顔を上げると、襟元の金髪を指でふぁさっと跳ね上げたのだ。ひるがえった金の髪が振った首の動きに一拍遅れて落ちてくる。ふたたび微笑んだ。
「フ……。僕の届けた愛を受け取ってくれたかい？」
あまりの気障さに、エステルは口から砂を吐いてしまいそうだ。
もちろん度肝を抜かれたのはエステルだけではない。周りを取り囲む兵士たちも呆気にとられた顔をしているし、ヨシュアも、怒りまくっていたシェラザードさえ、顔を引きつらせたまま硬直していた。どうやら声も出せないようだ。
「ああ……わかってくれたようだね。大切なのはラブ&ピース。今風に言えば、そういうことさ。ね？」
「そろそろ各地からの報告が入る頃合いだな？」
将軍がさっと目を逸らして部下に尋ねた。
(あ、無視した)
「頃・合・いだな？」
「あ、は、はい！　仰るとおりであります！」
「ではわしは任務に戻る。後は任せたぞ」
「は？」
「任せたぞ？」



「はい！」

（逃げた！）

微笑むオリビエと、モルガン将軍は一度も目を合わせようとしなかった——無理もない。

そのまま部屋を出ていくと、廊下を踏み鳴らして去っていった。

「今の逃げたんだよね……」

「気持ちはわかるけどね……」

エステルとヨシュアは小声で言い合う。

すっかり毒気を抜かれたシェラザードとともに、エステルたちは丁重に兵士たちによって兵舎から追い出されてしまった。

叩き出されたエステルたちを兵士のひとりが呼び止める。

「おい」

「なによ？」

不機嫌さを隠せずにエステルは応えた。

「忘れものだ」

兵士は振り返ると、背後にいた男をエステルたちのほうへと突き飛ばしてきた。

オリビエだった。

「生ものだからな。置いていかれても困る。ちゃんと持ち帰ってくれ」

「ちょ、ちょっと！」
「では、早々に立ち去るように」
取りつく島もなくそう言うと、バタンと扉を閉めてしまった。ご丁寧に、がちゃりと鍵を掛けた音まで聞かせてくれる。
「やれやれ。いつの時代も軍人とは無粋なものだね。やはり、君たちのほうが美しい。ボクは自分の審美眼に自信を持てそうだよ」
そう言って片目を瞑ったオリビエに、拳を叩きこまなかっただけ成長しているのだと、ヨシュアに慰められたが嬉しくない。
（だって、あの将軍にばれたのはあたしのせいだもんね……）
密かに落ち込んでしまう。
まあ、その後の騒動はキレたシェラザードによるところも大きいのだが。
「子猫ちゃん。そんな不機嫌そうな顔は君には似合わないさ。ほら、君のために楽しい歌を歌ってあげよう」
「……いいってば」
じと目で見つめ返してしまう。
落ち込むことを許さない男が何故か付いてきていた。拾ったつもりはないのだが。

† † †

結局、オリビエはボースに帰るエステルたちに最後まで同行してきた。

街に戻ったときには、すっかり空は薄暗くなっている。
食事がしたいというオリビエに、レストランの場所を教えてから別れた。
オリビエの背中を見送りながらエステルは言う。
「はぁ。つくづく、とんでもないヤツだったわね」
「とりあえず協会に行って、わかったことだけでも伝えておきましょ」
「あと、市長にも念のために知らせたほうが良さそうですね」
シェラザードとヨシュアの言葉に、エステルも頷く。
市長には情報が渡っているはず、というのはモルガン将軍の推測だ。きちんと報告を済ませておかないとまずい。
「でも、もう遅いよね。市長さん、迷惑じゃないかな？」
「そうねぇ。とりあえず支部に顔を出してから考えましょう」
シェラザードに言われて、エステルたちは遊撃士協会の支部へと戻る。受付のルグラン老人に得られた情報を伝えた。

「カブア一家か。確かに重要な情報じゃな！」
「ボース地方を荒らしていたっていう空賊団も、そいつらのことだと思うわ」
　シェラザードは、傍らのエステルとヨシュアを指さした。
「彼らは、その一味と戦ったことがあるのよ」
「ほう！」
「そのときに、空賊団の使っている飛行艇も見たっていう話」
　エステルは頷いた。
「ということは、その飛行艇を使って今までも事件を起こしてたのじゃろうな。なるほど、ロレントのほうまで幅広く手を広げられたはずじゃ」
「飛行艇を使えば、ひとっ飛びだもんね」
「うむ。しかし、強盗とはいっても、今まではセコイ事件しか起こした様子はなかったのじゃが……。家畜を盗んだりとか、港の置き荷をくすねたりとかな」
「言われてみれば……ロレントでもセコかったわよ」
「それが、定期船を乗っ取って王家相手に身代金請求ですか……」
　そこまでリスクの高い犯罪を犯すやつらには見えなかった。これは直接、カプア一家とやり合ったエステルたちの率直な感想だ。
「そのあたりの不自然さも気にしておく必要がありそうね」

　シェラザードがそう言ってまとめる。
　協会への報告を済ませたときには、もう夜もだいぶ更けていた。
　通りの角ごとに立っている導力灯の明かりが目にまぶしい。見つめていると、空の星が消えてしまうほどだ。
「どうしよう。お腹も空いちゃってるんだけど」
「食べてからだと、今日の報告は無理になるね」
「いちおう市長の屋敷に行ってみましょう。今日はもう面会できないということになれば、明日にするしかないわけだし。でも、まだ起きてるかもしれない。これ以上遅くなってからでは、その可能性はなくなっちゃうわ」
　シェラザードがきっぱりと言った。お腹がくうと小さく鳴った。夜闇のなかで、姉代わりの先輩遊撃士が赤くなる。
「シェラ姉、ご飯にする？」
　言った瞬間に、エステルのお腹もぐうと鳴った。
「シェラさん……エステル……」
「ほ、報告が先よ！　先生の行方は一刻を争うかもしれないんだから！」
「うん！　だよね！」
　二人とも意地っ張りだった。

ヨシュアが肩をすくめる。
どうせ、この二人は言っても聞かない。そんな顔をしていた。
お腹の鳴るのをこらえながら通りを西へ。
市長邸の門が見えてきた。
呼び鈴を鳴らそうとして門が開いているのに気づく。それどころか、数アージュ先の玄関口で言い合う声が聞こえてくる。
「今日のところはお帰りください」
冷たい声だ。
声の主はメイドだ。屋敷のなかからの明かりに逆光になっているから顔は見えない。それでもエステルには声から、リラという名の市長付きのメイドだとわかった。
「ま、待ってくれ！　これはちょっとした誤解なんだ！」
慌てたような男の声。
「そうですよぅ。誤解なんです。五階じゃないですよ？」
「おまえはしゃべるな！」
ぺしっと頭の後ろを叩く音。
（この声……この大道芸人の小芝居みたいなやりとり。こ、この人たちってば、まさか）
「痛いですよぅ、ナイアル先輩！」
「ドロシー！　おまえがしゃべるとややこしくなるんだよ！」
「なんでですかぁ……。アイドル役者顔負けの美人市長の写真があれば客寄せになるって先輩が言ったんじゃないですか。部数も倍増。誌面も稼げていっせきにちょ――」
「わーーーー！　言ってねえ！　言ってねえから！」
「え？」
「不思議そうな顔するなってんだよ！」
「言いましたよ？　昨日の夜です。すごくビックリしたのを覚えてますもん。ほら、ちょうど、あの居酒屋さんの《仰天チーズリゾット》を食べながらで、仰天だけにビックリだって……あ、もしかして、そういう洒落だったんですか？」
「ちげーよ！」
「では偶然だったんですかぁ！　すごいですよぅー」
「ああもう！　だから、しゃべるなっての！」
黙って聞いていたメイドのほうから、どす黒い気配が濃厚に漂ってきていた。
「お・帰・り・下・さ・い！」
きっぱりと、スタッカート付きで言った。
「ちが――……はい」
メイドの目つきを見てナイアルがうなだれる。目つきが本気だったのだ。わかりましたと、

男のほうは背中を向けた。女のほうはなんで？　とばかりに首を傾げたままだ。
そんな女の腕を引っ張って、男はとぼとぼと門を出てくる。
エステルたちにも気づかずに、二人そろって通りの向こうへと消えていった。
「ふう……あら？」
リラが、玄関先で立ち尽くしていたエステルたちのほうへと顔を向けた。
「こ、こんにちは」
「まあ。遊撃士のみなさん。ハーケン門からお帰りになったのですね」
「あ、うん。あの……ところで今の人たちって……リベール通信社の……」
「不届き者です」
「へ？」
「不逞の輩ですわ」
「あ？」
「わたしの大切なお嬢様を利用しようとする、悪辣で下賤な輩です。ええ、間違いなく！」
「そ、そうなんだ……」
「さ、みなさまはどうぞなかへ。市長がお待ちになっています」
そう言って、にっこりと微笑むリラが、ちょっとだけエステルは怖かった。
市長はまだ自室に籠って仕事をしていた。
訪ねたエステルたちを、笑顔で出迎える。
報告を済ませて市長邸を出たときには、月が真上にまで昇っていた。

† † †

入った途端に酒の匂いが鼻をついた。
居酒屋《キルシュ》は夜も遅いというのに――いや、遅いからか――客でいっぱいだった。席がすでに埋まってしまっている。
「これは……相席で座るしかないわねー」
「仕方ないですね」
「シェラ姉、あそこ空いてる！」
エステルが指さしたのは二階に向かう途中の踊り場に設置されているテーブルだ。広めにとってある階段の踊り場とはいえ、テーブルの脇をひっきりなしに客たちが上下するとあって、あまり人気の無い席のようで、ひとりしか座っていない。
近づいて驚く。そのひとりにエステルは見覚えがあった。
酔っぱらってテーブルにつっぷしているが間違いない。せっかくのスーツを着崩して皺だらけにしている男は、リベール通信社のナイアルだった。

先ほど市長邸ですれちがった、メイドのリラに不逞の輩呼ばわりされていた男だ。
「男のクセにだらしないわねー」
「お酒は底なしのシェラ姉に言われてもねぇ……あ、起きたみたい」
　耳元で騒がれていたからか、つっぷしていた身体を起こすと、左右を見渡した。
「うー、ここは？」
「呑み過ぎは身体に良くないですよ？」
　その言葉にナイアルの目がヨシュアへと向く。
「うん？　おめえは……なんでここに新米遊撃士どもが居やがる。はて……俺はボースまで来てたはずだが……」
「何、寝ぼけてんのよ？　あたしたちもボースに来たんだってば。ていうか、さっき市長さんの家の前で会ったんだけど、覚えてない？」
「ああ？　……市長の家の前だと？」
「そそ、ほら、リラさんに追い返されてたじゃないの」
「りら？」
「メイドの」
「ああ……。って、あれを見てただと!?」
　ナイアルの赤かった顔が面白いくらいに白くなった。

「うん。見てたわよ」
「ど、どこからだ？」
「どこって……待ってくれ誤解なんだーってあたりから？」
「なっ！」
「美人の市長の写真があれば部数倍増とかなんとかって言ってたわね。ドロシーが」
　その言葉がとどめだったらしく、ナイアルはふたたびテーブルにつっぷした。
「あれ？　おーい」
　エステルの呼びかけに、喉の奥から出したようなくぐもった声で「聞こえてるよ」と返してきた。
　顔をあげて、エステルたちをもう一度見る。
「んー。見慣れない色っぽい姉ちゃんがいるな」
「初めまして、記者さん。シェラザード・ハーヴェイよ。この子たちの先輩にあたるわ」
「シェラザード……」
　ナイアルが一瞬だけ遠い記憶を漁るような目つきになり、それからはっとなってシェラザードの顔を見返した。
「もしかして、《銀閃のシェラザード》か？」
「あら。名前を覚えていただけてるなんて光栄ね」

「マジか！　若手遊撃士のなかでは一、二を争うって噂の……。となると、おまえさんたちも例の事件を調べに来たってわけか」
急に目を生き生きと輝かせるのだから、こう見えても本物の記者なのだな、とエステルは思った。
「まあ、ね。……ここ、いいかしら？」
言いながら、シェラザードがナイアルの向かいに座る。ナイアルの了承を待って、エステルとヨシュアもそれぞれ席についた。
それぞれ料理を注文する。エステルたちだってお腹が空いてるのだ。なにしろ、ハーケン門から歩き通して何も食べていない。
「このレッドテールスープって辛くて美味しいっ」
「さすがにボースだね。いい食材を使ってるみたいだ」
エステルとヨシュアは料理に舌鼓を打ち、シェラザードはもっぱらお酒だった。ロクに食べずに呑んでいる。あまりにも早いペースでボトルを空にしていくので、向かいに座っているナイアルが絶句していた。
「で、記者さん。困ってるみたいね？」
呑みながら、シェラザードが水を向ける。
「ああ、まあな……。見てたなら知ってるだろ」
「リラさんを怒らしてたのは知ってる」
「あれはあのトンチキ娘が！　……ああ、そうだよ！　ネタが無くて困ってたところさ！」
ドロシーのせいにできずに認めるあたりに、この記者の性格の良さが出ている。エステルとしてはちょっとだけ好感度を上げてもいいかな、と思うところだ。
「軍のせいですか？」
ヨシュアの問いにナイアルが頷いた。
「それが大きいな。軍の情報統制のおかげで、行方不明の飛行船が事故かどうかもわからない状況なんだよ。噂だと、ボースの有力商人も乗ってたってぇ話もあって。ま、そういうわけで、せめて美人市長さんのコメントでも取れれば、って頑張ってみたんだけどな」
それがあいつのせいで、と小声で付け加えてしまうところに、善人にもなり切れないところがある記者だった。それだけ追い詰められているということでもある。
エステルはちらりとヨシュアの顔を窺う。
こくりと小さく頷きを返してきた。
「そんなに知りたければ情報を教えてあげてもいいわよ？」
「へ？」
「あたしたち市長さんの紹介で、軍の上のほうの人に会ってきたばかりなのよね」
「……マジで？」

「うん。マジで」
「おおお！　そ、そいつは女神の助けだ。捨てる女神あれば、拾う女神ありだな！」
　この場合の捨てた女神って、ドロシーのことなんだろうか？
　どうでもいいことをつい考えてしまうエステルだった。
（まあ、ここから先はヨシュアの出番だし）
「その代り、条件があります」
　エステルの言葉を引き取ってヨシュアが話し始める。「条件だと？」とナイアルが警戒を顔に滲ませた。
「等価交換ですよ。何かを得るためには何かを払わねば」
「ミラなんてもってねえぞ。こちとら貧乏記者だかんな」
「いりませんよ。僕たちが欲しいのも情報なんです。ナイアルさんたちは、僕たちよりもかなり前にボースに着いてましたよね」
「お互いの情報を交換し合おうってのか？　言っとくけど、こっちのネタなんてたいしたもんじゃねえぞ」
「それは聞いてみての話です。ただし、出し惜しみはなしですよ？」
　ヨシュアがさらりと言った。
　まるで歴戦の交渉人（ネゴシエーター）の如くだ。

　ノリノリだった。
「ヨシュアってば、こういう駆け引きが向いてるみたいね」
　シェラザードがエステルに耳打ちした。
　エステルも思わず頷いてしまう。
「ちっ。わかったよ。かわいい顔をしてるくせに、しっかりしてやがる……」
　そう言ってから、ナイアルは自分の集めた情報を話してくれた。
　かわいい、というのがヨシュアに向かって言った言葉なのが、ちょっと引っかかるものの、貴重な情報だ。エステルは聞き耳を立てた。

『ナイアルの話』

　といっても、俺がボースに来たのも、そんなに前じゃない。
　おまえさんたちよりちょっと前ってくらいだ。
　そもそもはボース地方で強盗事件が数多く起きている、って話を追っかけてココに来たってわけで。ま、ひとつひとつはたいしたことのない事件らしかったんだけどな。
　それが、来てすぐだ。
　例の飛行船失踪事件が起こった。

大きな船が一隻、行方不明になっちまったってんだからさ。でかいヤマだと思った。
もう、小さな強盗事件なんてどうでもいい、って思ったね。
で、俺とドロシーはさっそく聞き込みを始めたわけだ。
そうして最初に手に入れたネタってのが、ラヴェンヌ村での目撃情報だよ。
ラヴェンヌ村は知ってるだろ？
そう、ボースの西のほうにある小さな村だな。
村人のひとりが、事件のあった夜に『空飛ぶ影』を見たってのさ。これだけ聞けば、例の飛行船のことだって思うだろう？
ところが――。
軍の部隊もこの情報を手に入れて、影を見たってあたりを捜索したらしいんだが、何も見つけられなかったらしい。空振りだった、ってわけだ。
まあ、そういうことはこの仕事をしてればよくあることなんだけどな。
たいした情報じゃなくてすまねぇな。
それで終わりか、だと？
いいや、もうひとつあるぜ。
この失踪事件に軍の情報部が動き始めてるってことだ。
ん？　情報部を知らねえのか？

そう、そっちの姉ちゃんの言うとおりだよ。最近、軍に新しくできたばかりの情報収集と分析を専門に行う集団だ。
ああ、王室親衛隊と並ぶほどのエリートたちで構成されているらしい。そこのトップがリシャール大佐って奴で、これまたキレ者って噂でな。
っと、そこは今はどうでもいいか。
その情報部が、なんだか盛んに動いているらしいのさ。
ま、こんなところだな。

「あんまり捜査の役には立たなそう……」
ついエステルは言ってしまって、ナイアルが憮然とした顔になる。
「悪かったな。で、そっちの掴んでる情報ってのは？」
「いま教えるってば」
エステルたちは、ロレントからの一連の流れをかいつまんでナイアルに伝える。もちろん、伝えても問題なさそうな部分だけだ。
気のなさそうに聞いていたが、途中から身を乗り出してきた。
「空賊団カプア一家……と、ハイジャックだと!?　それだ！　そういうネタが欲しかったんだよ！　よおし、これでとっかかりが見えたぜ！」

椅子から立ち上がり、ドロシーを見つけねえと、とつぶやきながら勘定を支払いあっという間に店を出て行った。

「すっごい勢い……」

「よっぽどネタに詰まってたんだろうね」

ヨシュアが言った。エステルも同感だ。

それと、とちらりと考える。なんだかんだ言いながら、相棒のことを必要としているようだ、とも思った。

「で、どう、あんたたちは今の話から何か気になったことあった?」

シェラザードが試すようにエステルとヨシュアに問いかけてくる。

「あたしは……ラヴェンヌ村に行ってみたいな」

「ああ、空飛ぶ影を見たっていうところだね」

「うん」

「軍も一応調べたみたいだけど?」

「でも、何か見逃してるかもしれないし」

エステルとしても確信があるわけではない。なんとなく、気になるという程度だ。

けれど、今のエステルたちには他に当てもない。

「そうね。ダメもとで調べる価値はあるかも……。明日、さっそく行ってみましょうか」

シェラザードがあっさりと賛成したところを見ると、彼女も気になっていたようだ。

三人は夕食の残りを片付けると、その晩はボースのホテルに泊まった。

翌日は、からりと晴れた青空で。

エステルたちは、西ボース街道を西へと歩いた。

昼には、ラヴェンヌ村へと至る街道の分岐点まで辿りつき。

そこで、魔獣に襲われた。

第六幕　家族だから

襲ってきたのは、《ロックペッカー》――黄色い羽毛をもつ大型の魔鳥だった。
木の上からいきなり襲いかかってきて不意を突かれたのだ。
慌てたエステルたちは隊列を崩してしまった。
「くっ！　この！」
エステルは、杖を振り回し、爪と嘴（クチバシ）で身体をつつきまわしてくるロックペッカーをなんとか遠ざける。
宙へと逃げたロックペッカーは、エステルたちを見下ろしながら隙を窺っていた。
ひときわ大きく翼を打ち鳴らす。
「来た！」
鳥型魔獣が急降下してくる。
狙われたのは――ヨシュアだ！
「ヨシュア！」
エステルは慌ててヨシュアのほうへと駆けつけようとした。獣というのは最も弱そうな相手から狙うものだ。三人のなかならば見た目としてはエステルだと思っていた。
それがヨシュアに向かっていく。
予想外だし、まずい。ヨシュアの手にしているクナイという武器は、短剣ほどの長さしかなく、敵のふところにもぐりこんで使う。空飛ぶ相手から強襲されるというのは苦手なはず――。
だが、そのときヨシュアと魔獣の間に割り込む影があった。
「せぇぇぇやあああ！」
大声とともに空気の鳴る音が聞こえてくる。
剣だ。
身の丈よりも長い剣が風を巻き込んで魔獣へと叩き込まれた！
両手持ちの大型剣が魔獣の翼を切り裂く。
盛大に羽が舞いあがった。
短い悲鳴。
次の瞬間、ロックペッカーは地に叩きつけられていた。
もう動かない……。
「ふう……やれやれ」
と、息をひとつ吐いてから、大剣の持ち主は振り返った。赤い髪をした若い男だ。
シェラザードが男の顔を見て叫ぶ。

「アガット！」
「ん？　おう、シェラザードか。珍しいところで会うもんだな」
「それはこっちの台詞だわ。どこかで見たことある髪の色と剣だと思ったら……」
「なんだ。助けは無用だったか」
「いえ、一応お礼は言っておくわ」
「ふん。まあ、腹ごなしていどにはなったぜ。……ところで、そこのガキどもはなんだ？　新入りみたいだが」
　アガットと呼ばれた男は大剣を背負いなおすと、シェラザードに問いかけた。
「ああ、あなたは知らなかったわね。ふふん、聞いて驚きなさい。カシウス先生のお子さんよ」
「なっ！　あのオッサンの子ども……だと？　……ふーん」
　じろじろと無遠慮な視線をエステルとヨシュアにぶつけてくる。
「な、なによ？」
「そっちの黒髪の小僧はともかく、こっちの小娘はシロウトだな。本当にオッサンの娘なのか？」
「あ、あんですってー!?」
　一瞬でエステルの頭に血が昇る。
　言うに事欠いて、シロウト呼ばわりなんて。そんなエステルの肩に手をかけて引きとめながら、ヨシュアが口を挟む。

「この子は間違いなくカシウス・ブライトの娘です。僕のほうは養子ですけど」
　涼やかな瞳でヨシュアはアガットを見つめた。
「ふーん……ま、どっちでもいいけどよ」
「良くない！」
　エステルはつい叫んでしまった。
「じゃあな。シェラザード。子守り、頑張ってくれ」
「ちょっと待ちなさい。アガット、あなたのことだから、先生が空賊に捕まったかもっていう話は聞いてるんでしょう？」
「捕まった？　あのカシウス・ブライトが？」
　アガットは冗談きついぜと笑った。
　それ以上は、何も言わずに背中越しに手をひらひらと振ると、街道に戻って歩き去った。行き先は西。ルーアンのほうだ。
「なるほど。あれが……《重剣のアガット》か」
　ヨシュアがようやくわかったという感じでつぶやいた。
「重剣のアガット？」
「アガット・クロスナー。正遊撃士よ。中型の魔獣なら一刀両断にできるあの大きな剣があいつの得物ね」

「だから、重剣……」
たしかに巨大な剣だった。エステルだと、そもそも持てるかどうかもわからない。剣というのは、ようするにすべて鉄の塊なわけだ。あれだけ大きいと、子どもの重さくらいはありそうだ。
「ふ、ふんだ。凄腕だろうが、失礼なやつには違いないもん！」
「父さんの腕は認めているみたいだったけど、あんまり好意的じゃなさそうだったね」
「色々と事情があってね……」
どんな、と聞きそうになって、エステルは口を閉じた。
（あんな失礼な奴のことなんて気にしてる場合じゃないもんね！）
「それより、ラヴェンヌ村に急ぎましょっ！」
エステルはむりやり男のことを頭から追い出した。
街道を離れてエステルたち三人は北へと曲がる。
ほどなくして小さな村が見えてきた。
そして、エステルたちは、村にいる目撃者から、ついに手がかりを得たのだ。

† † †

ラヴェンヌ村の北にある山では、昔は七耀石が採掘できた。
だが、長い年月、掘り進めていくうちに坑道が枯れてしまった。七耀石は採れなくなり採掘していた鉱夫たちは山を去った。
「ずいぶん詳しいですね、前にも来たことが？」
ラヴェンヌ村の蘊蓄（うんちく）を語ったシェラザードに、ヨシュアが尋ねる。
「修行の旅をしていた頃にね。あの時は、王国全土を歩き回ったもんだわ」
「えっ、シェラ姉、歩いて旅をしたの⁉」
狭いとはいえリベール王国を徒歩で旅するのは楽ではないはずだ。
「飛行船は大きな街しか結んでいないでしょ？」
「えっ？　うん……そうだけど」
「その便利さに慣れると、街と街の間に小さな村があることも、山奥の洞窟にこっそりと小さな獣が隠れて棲んでいることも、谷の底にひっそりと咲く小さな花があることも忘れてしまう。まずは、自分が守るべき場所を、実際に歩きながら確かめてみろ……。そんな風にカシウス先生に勧められたのよ」
「へぇ、父さんが……」
（メチャクチャ意外なんだけど！）
エステルの知らない父の顔をシェラザードは知っているのだ。

「でも、実際にここに来るのは数年ぶりだわ」
見えてきた村を見つめながらシェラザードが言った。
村で、エステルたちはひとりの男の子と会った。その子が『空飛ぶ影』の目撃者だった。彼の証言によれば、月を背に夜空のなかを大小二つの影が動くのを見たという。
飛行船と空賊艇。
そう考えられないこともない。
二つの影は北の山のほうへと消えていったそうだ。
当然ながら、エステルたちは昔は七耀石の鉱山だったという北の山へと向かった。
坑道の入り口に辿りつく。そこには扉が取りつけられ、太い鉄の鎖で頑丈に施錠されていた。迂闊になかに入って怪我をする人が出ないようにだろう。
「鍵は掛かったままだね」
ヨシュアが錠前を調べて言った。
「ということは、空賊たちがこの廃坑を利用している可能性はない……ってことよね」
「そうなるわね」
シェラザードがよくできましたと頷く。
軍が引き返したのは、そのためだろう。

王国軍も証言を聞きこの北の山を捜索したらしい。そして、廃坑が閉鎖されたままであることを確認したわけだ。
「でも、あの男の子の言ってたことも気になるのよね……ん?」
「どうしたの、エステル?」
「シェラ姉……。気のせいかもしれないけど、ここ、なかから風が吹いてきてない?」
「なかから?」
「確かめてみよう」
ヨシュアが扉の前に立った。指を舌でしめらせてから、扉の隙間に当てる。
「…………本当だ……わずかだけど風が吹いてきている」
「あ、やっぱり」
「驚いた。よくわかったわね」
シェラザードも、ヨシュアの真似をして確かめてから言った。
「風が吹いてるっていうことは、どこか他にも入り口があって、外と繋がっているかもしれない……ということだね。調べてみる価値はありそうだ」
「じゃあ、さっそく鍵をブチ壊して――」
「こらこら止めなさい」
シェラザードが慌てて止める。もちろん、エステルだって本気で鍵を壊していいと思ってい

たわけではない。緊急事態だからやってもいいか、とちらりとも思わなかったかと言われると嘘になるが……。

エステルたちはいちど村へと戻り、村長から鍵を借りてきて廃坑に入った。

「やっぱり風が吹いてるね……」

頬に空気の流れを感じる。

打ち捨てられた坑内には明かりの類はすでにない。エステルたちは手持ちの導力灯のみを頼りにしてまわりを照らした。

七耀石の鉱山に入るのはこれで二度目になるけれど、採掘している人たちの姿もない穴のなかは、がらんとしていて静かすぎてちょっと薄気味わるい。

入ってすぐの丸く開けた部屋から、北に向かって細い坑道が伸びている。その道はすぐ先で左右に分かれているようだ。

「とりあえず風の流れを頼りに探ってみましょうか」

シェラザードが言って三人は歩き始める。

順番は、気配を探るのに長けたヨシュアが先頭、背後からの襲撃に備えてシェラザードが最後尾となる。

エステルは彼らの間だ。なんだか護られているようで落ち着かなかった。

しばらく進むと、ひょうたんの形をした採掘場へと行き当たった。大きな広間と小さな広間

をくっつけたような形と言えばわかるだろうか。

小さな部屋の北側の壁が崩れていた。

縦に裂けた壁の隙間は人ひとりが通れるほども開いている。

「大きな地割れだね。地震のせいかも……」

「行けそう？」

「ここで待ってて。見てくるから」

そう言って、さっさとヨシュアが割れた壁の隙間を先へと進んでゆく。エステルは、自分も付いていこうとしたが、すぐにヨシュアが戻ってきた。

「当たりだ」

と言った。

その顔と言葉に、エステルの心臓がどくんと大きく鳴った。

† † †

「行くわよ」

常にない真剣な口調でシェラザードが言った。

割れた壁の先にできた道は、足下も平らでなく尖った岩ばかりで歩きにくい。

だが思ったよりも短い時間で、前が明るくなり、開けた場所に出た。
緑と青空が、闇に馴れた目にまぶしく刺さる。
そこは山あいの谷間だった。
森の切れ間に開いた大地が広がっている。
そして、目の前に続く草の原に大きな飛行船――《リンデ号》が着地していた。
「こんなところに……！」
「たぶん、空賊たちは上から見て、ここに空き地があることを知ってたんだわ。で、ここに着地するように誘導したのね。でも、あたりに空賊たちの船らしきものは見当たらない。ということは……」
「とりあえず、なかを探ったほうがいいよね、シェラ姉」
エステルの言葉にシェラザードが頷く。
飛行船の扉に鍵は掛かっておらず、エステルたちは船のなかを調べることができた。上から下まで順に見ていったが、人間は誰ひとり残っていなかった。船の乗客も乗員も。積荷の類も見当たらず、どこかに運び出してしまったようだ。
それどころか呆れたことに、飛行船の機関部――導力炉（エンジン）まで奪い取ってあった。これではもう、この飛行船は飛ぶことができない。
「でも、こんなのあの空賊たちの船にぜんぶ詰めるのかしら？」

ふと漏らしたエステルの言葉に、シェラザードが返事を返してくる。
「いい推測ね」
「へ？」
どういうこと？　とエステルは首を傾げる。そこまで深いことを言ったつもりはなかったのだ。
「ここに飛行船を着陸させたのは、この山あいの空き地が着陸させられるだけの広さを持っていたから。導力炉を船から外すには、それなりの手間と時間が必要だから、着地させてじっくりやらないといけない」
「うん」
それはわかる。
「でも、ここに空賊艇はないから、ここは空賊たちのアジトではない。積荷や導力炉、乗員乗客たちを何度も空賊艇で往復させてどこかに運んでいる。どこかっていうのは、つまり彼らのアジトってことね。はい、ここから得られる結論は？」
「え？　ええと……」
「つまりシェラさんは、アジトがあるなら、なぜそのアジトに最初から飛行船を運ばなかったのか、って訊いているんですよね？」
ヨシュアが尋ねて、シェラザードが頷いた。

二人のやりとりを聞いていて、エステルの頭に閃くものがあった。
「あ……。わかったかも。なにか直接そこに運べない理由があるんだ。よっぽど特殊な場所で《リンデ号》だと辿りつけないような……」
「そういうことね。彼らのアジトは、十から十五アージュほど……つまり、空賊艇程度の小型船のみが着陸できるような特殊な場所にあるとみたわ」
「山岳や峡谷のような、広い場所のない、入り組んだ地形……ということですか」
ヨシュアが補足する。
「そうか……。ということは、連れ去られた人質たちも、まだそこにいる可能性があるってことよね」
「だね。ただ……となると、その場所は徒歩では辿りつけないかも。この場所だって、たまたま廃坑と繋がっていなかったら、見つけられなかったわけだしさ」
ヨシュアが言った。
エステルとシェラザードは、その言葉に黙り込んでしまう。
そうなると、見つけられる可能性があるのは軍だけだ。遊撃士たちは飛行船を持っていないが、彼らは自前の飛行船を持っている。
「いまさら頼りたくないんだけど……」
「どのみち、見つけたこの船の報告はしないといけないし。人質のことを考えると、協力を頼

んだほうがいいと思うけど」
ヨシュアに諭されて、エステルは気持ちを切り替えた。
「そうか……。拘ってる場合じゃないよね」
「とりあえず支部に戻って報告しましょう。導力通信を使えばハーケン門にはすぐに連絡を入れられるわ」
シェラザードがそう言ってまとめる。
方針を決めて、エステルたちは調べ終えた飛行船から出ることにした。
扉を開け、外へ出る。
「えっ……」
目の前の光景を見て、エステルたちは凍りついた。
飛行船はいつの間にか軍人たちに包囲されていたのだ。
「お前たち！　おとなしく手を上げろ！」
先頭にいた兵士が導力銃を構えながら言った。
「ちょ……ちょっと待ってよ」
「しゃべるな！　黙っておとなしく手を上げるんだ。この空賊たちめ！」
「だ、誰が空賊ですってぇ!?　この紋章が目に入らないの！」
エステルは自分の胸に付いている遊撃士の紋章を指さした。一瞬、導力銃を構えていた兵士

の顔色が変わる。

だが、取り囲む兵士の後ろから野太い声が放たれた。

「ふん。遊撃士の紋章など、潔白の照明にならぬわ！」

威風堂々たる体格の人物が兵士の壁を割って姿を見せる。

「モルガン将軍……！　どうしてここに!?」

「兵士たちの出してきた資料をあたりなおして、このあたりの調査が不充分と判断したのでな。自分の目で確かめに来たのだが……ようやくネズミを捕まえたようだ」

「ちょ、ちょっと待って――」

「言い訳は後で聞く。おまえたち、こやつらを引っ捕らえい！」

「ちょっとおお！」



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.111

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/